



Title	趣味縁の研究 : 札幌のOYOYOゼミと前橋 部の事例から [全文の要約]
Author(s)	加藤, 康子
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第13704号
Issue Date	2019-06-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74991
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Yasuko_Katou_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア） 氏名：加藤 康子

学位論文題名

「趣味縁の研究～札幌の OYOYO ゼミと前橋〇〇部の事例から～」

本研究は、趣味を契機とした人のつながりを趣味縁と呼び、先行研究の検証と対象事例の分析を通じて、趣味縁の特徴や活動実態、参加者および立地エリアへの影響や波及効果などをまとめた実証研究である。

1. 研究の趣旨と目的

趣味縁という言葉が1985年2月に国立民族博物館で行われたシンポジウム「日本人の人間関係」¹で、「社縁²の人間関係」を論じた文化心理学者の井上忠司の論考に初めて登場してから2019年現在までに既に30年以上が経った。趣味縁とは、文字通り趣味を契機とした人間関係のことである。いま、趣味縁は現代社会の中で人々のどのような需要に応えるつながりを形成し、どのような姿で社会に立ち現れているのだろうか。

上記の1985年のシンポジウムでは、当時の社会において血縁、地縁の領域が縮小し、血縁地縁以外として扱われていた社縁（結社縁）の領域の人間関係が大幅に拡大したことを受け、特に社縁の変化を再整理する形で教育社会学や社会学、文化心理学の論者らから分析が発表された。その中で井上は人間関係の結合の契機に注目し、「社縁」の変容を「趣味縁」「選択縁」「情報縁」の3点に要約して説明を行った。この変容の時代背景として、井上は人々が戦後になって「ためにする」という有用性の道徳観から初めて解放されたことに言及する。そして、趣味縁はそれまでの目的志向型よりも、活動そのものが目的であるような愉しみ志向型の顕著な傾向を持つ集団であると指摘した。

同じシンポジウムで登壇した社会学者の上野千鶴子は、血縁、地縁、社縁以外の第4のカテゴリーとして「選択縁」という概念を提唱した。

これらの先行研究を受け、かつ筆者自身の参与観察事例の特徴をよく説明するものとして、①有用性からの逸脱、②選択縁であること、③（既存の社会的役割からの）脱役割を、筆者は趣味縁の重要な特質と捉えた。この3要因すべて、社会的有用性、経済価値を離れたところに展開される「遊び」の領域でこそ発現可能な特徴である。第2章以降で詳述するが、趣味縁は、

¹ 1985年2月20日から22日まで、同博物館館内外の研究者を集めて開催され、1987年にドメス出版より『現代日本文化における伝統と変容3 日本人の人間関係』として出版された。

² 「社縁」とは、もともと「結社縁」の意。血縁・地縁を除くすべての人間関係を指す名称である。（上野, 1987, 226 ページによる）

そこに参加する個人においても、活動が立ち現れる社会空間においても、実業（仕事）の領域との緊張関係の上に成立している。そうした実業の時空間や原理の外にあることによってこそ、趣味縁の活動が個人と本業の関係の結び直し（転職や本業化など）の契機をもたらしたり、趣味縁の拠点が都心の遊休不動産の産業用途転換や質的变化（第5章で詳述）を媒介したりする姿もしばしば観察されてきた。

こうした趣味縁活動は私的活動領域に属し、従来は自宅などの個人空間やカルチャー・センターの教室、市民サークルの会合などの閉鎖空間で、当事者のみで行われることが多かった。しかし2008年前後の札幌では、都心部という産業集積地に市民有志で非営利の趣味縁の拠点が参入する姿が相次いで観察されるようになった。周辺は、各種デパート、ファッションビル、オフィスビル、銀行、市役所などの官公庁、新聞社、ホテル、大手商社や証券会社などの本社や札幌支店などが建ち並ぶオフィス街であり商店街である。なぜ、このような重厚な産業空間に市民非営利の弱小集団が参入することが出来るのか。遊びの領域にある趣味縁が、なぜ実業の世界に持続的に存続できるのか。実は同様の現象は札幌以外に、群馬県の県庁所在地である前橋市の中央商店街でも、2010年代初頭から市民有志が空き家や空きテナントを趣味縁活動の拠点として利用する形で起こっていた。

本研究は、これらの事例観察と資料調査を通じて、以下の3点について明らかにすることを目的としている。

第1に、現代日本社会のつながりの中における趣味縁の位置付けを検証する。日本社会における「つながり」についての先行研究や各種世論調査、統計資料などの分析を踏まえた上で、現代の趣味縁が諸々のつながりの中でどのような位置付けにあるのか、また今後において趣味縁にどのような可能性が期待されているのかを明らかにしていく。

第2に、本研究の対象事例は趣味縁の集団としてこれまで報告されていない新しいタイプであるため、その活動実態を分析する。従来の先行研究による趣味縁の対象事例は、将棋やガーデニング、鉄道、サブカルチャーなど、何らかの単一・特定テーマを契機にした集団であった。しかし本研究の事例では、複数テーマの趣味を週替わり、もしくは活動回替わりで流動的に取り扱っている点に顕著な差異を有する。OYOYOゼミや前橋〇〇部のような集団は、いわば複数・多彩な趣味活動のプラットフォームを参加者たちに提供しており、都市的な新たなつながりの形であると言える。このような趣味縁の集団は、新たにどのような特徴を備え、参加者に何をもたらしているのか。札幌市と前橋市の事例に則しながらこの解明を試みる。

第3に、こうした趣味縁の集団と立地エリアとの関係を分析する。なぜ近年になって都心部に参入可能となったのか、そうした拠点が立地するエリアに何らかの効果を及ぼしているのか。及ぼしているとすれば、それはどのようなものなのか。事例に共通する参入要因や条件はあるのか。第2の研究・クエスチョンが趣味縁集団の内側へのまなざしであるとするならば、第3の研究・クエスチョンは外との関係についてであり、地勢データや参与観察の結果から実態の解明を試みる。

2. 対象事例と研究方法

対象事例は次の二つの趣味縁の活動集団である。まず札幌の都心部で活動した OYOYO まち×アートセンター（以下 OYOYO と略称、2008～2017年）を主な対象事例として記述・分析を行い、次いで群馬県前橋市の「前橋〇〇部」（2012年2月～）との比較を行っている。

研究方法では、それぞれ参与観察やインタビュー調査などの質的手法と、行政資料や民間のオフィス市況ほか統計データなどによる分析の量的手法を併せて用いている。

3. 論文の構成内容

本研究は、全部で6章で構成されている。

3.1. 第1章 序論

第1章では、趣味縁についての本研究の趣旨と目的、対象事例と研究方法、論文全体の構成について記述した。

3.2. 第2章 趣味縁の系譜

第2章では、趣味縁について2つの観点から先行研究を整理した。

前半では、現代日本社会における諸々のつながりの変遷の中での趣味縁の位置づけを整理し、その上で本研究に期待される効果を記述した。伝統的な地縁・血縁・社縁（結社縁）への全面的なつながりを望む割合は、NHK放送文化研究所 第9回「現代日本人の意識」調査（2013）ほかの数値に見られるように長期にわたり減少傾向にある。しかし、信頼研究の山岸俊男が指摘するように、日本社会は見知らぬ他人に対しての一般的信頼に基づく社会ではなく、江戸時代以来の閉鎖集団内部における安心社会として発展してきた経緯を持つ。近年のアンケート調査では、個人にとって一番大事なものは家族であり、所属集団外の人、特に初対面の人を信頼しない傾向が日本は国際比較においても高い。加えて OECD の統計でも個人の社会的孤立の傾向も極めて強い。こうした「社会的孤立」「個人化の負荷」を緩和するためには、日本社会は今後、「個人と個人がつながる」ような広井良典のいう都市的つながり（広井, 2009, 18 ページ）を拡充することが課題となる。

このように伝統的つながりの比重が低下し続ける現代社会において、伝統的つながり以外の「第4のカテゴリー」として上野（1987）が提案した「選択縁」は、今後さらに相対的に比重が増し、社会で重要となっていくと考えられる。そして選択縁の中でも、世論調査で多くの現代日本人が「生きがい」として「趣味」を上げていることから、諸個人が自発的に選び取っていく趣味縁こそが、日本の現代市民の志向に添った形であり、都市的つながりの拡充を考える上での実現性の高い解決策の一つであると考えることが出来る。

第2章の後半では、趣味縁という学術用語の登場と、趣味縁に関する学術研究の系譜を検証した。1985年の国立民族学博物館主催のシンポジウムで登壇した一人、井上が「仮に」と担保しながら「趣味縁」という用語で選択縁の精緻化を試みたのが嚆矢である。その後、同じシンポジウムで別の部会に参加していた藤田英典が、経済効率一辺倒で編成された市民の時空間を相対化する基軸として「趣味縁」をキーワードに論文（藤田, 1991）を発表する。管見の限り、これが「趣味縁」が学術用語として登場した経緯である。

同じシンポジウムで社会学者の上野千鶴子は、社縁が必ずしも選べる縁ではなくなっている現状を指摘し、それまでの地縁・血縁・社縁とは別の新たな第4カテゴリーとして、現実的に個人に加入離脱の選択権がある「選択縁」の概念を提示した。

また直接に趣味縁という言葉を用いてはいないが、江戸時代の「連」というつながりの研究（池上, 2005）や、戦前戦後を通じてのサークル文化や同好会の研究（藤井, 1987）、そして近年

では浅野智彦の趣味縁研究（浅野, 2011）などにより、趣味縁の研究は精緻化されてきた。

本研究ではこれらの先行研究全体の知見から、第3章と第4章で対象事例として取り上げる趣味縁集団の活動分析への補助線として、趣味縁の特色として次の3要素を挙げた。

- ①社会的「有用性」からの逸脱
- ②参加はあくまでも本人の自由意思による「選択縁」であること
- ③既存の役割からの解放（脱役割）と変身が可能となること

これらの3要素は、趣味縁と背中合わせの関係にある家庭や生業の場と、いずれも緊張関係を持ちながら成立している。第2章では、この3つの特徴に着目し趣味縁研究の再整理と概念拡張を試みた。

3.3. 第3章 対象事例：OYOYO

第3章では、趣味縁の事例として、札幌のOYOYOゼミの概要紹介と分析を行った。

本研究でとりあげる事例は札幌市（第3章）・前橋市（第4章）とも、先行研究が鉄道や同人誌など単一で特定テーマによる趣味縁集団にフォーカスしてきたのに対し、複数テーマの趣味を流動的に取り扱う趣味縁集団である。両事例とも、活動テーマの趣味そのものよりも、趣味を介して生まれるつながりの方に重点が置かれていた。いわば「趣味のプラットフォーム型」とも言うべき様態がとられている点、これこそが市民個々の潜在的な人的資源を自在に活動資源として表出させる活動デザインとして特筆されるべき大きな特色であり、本研究はこの点にアプローチした最初の研究として位置付けられる。

2000年代に入ると札幌駅前の再開発に伴って従来の都心部であった大通地区が衰退、特に築年数を経たオフィスビルに長期の空室が多発するようになった。特に札幌の新規オフィス市況が急落した2007～2008年の時期、そうした都心部の隙間空間に参入してきたのがOYOYOはじめ市民有志で非営利の趣味縁集団であった。

OYOYOは、札幌のまちづくり会社である株式会社ノーザンクロスが創立構想を練り、市民が自発的に参加することで波及効果が周辺エリアに及び、自然と活性化につながるよう活動デザインが工夫されていた。市民による持続的な運営が可能となるよう学校の課外活動を模した「部活制」が採用され、参加者が分限オーナーとして主体的に活動するよう期待された。2008年5月のオープン以来、OYOYOの部活制は試行錯誤と独立や統廃合を繰り返し、2012年5月にはOYOYOゼミとして一本化される。

創立当初から家賃への対応で精一杯で資金繰りには余裕が無かったため、毎週の活動はメンバー自身が持つスキルや専門性、経験、趣味嗜好など内的資源をコンテンツとする方向で早い時期から活動デザインが作られていった。具体的にはクロッキーや撮影講座などもあったが、メンバーが順番に講師となって自らの趣味や好きなものについて語るリレーレクチャーをはじめ、ワークショップや打ち合わせ、お宝鑑賞会など、活動の実態は参加者全員によるコミュニケーションとしてデザインされていた。

メンバーの個人資源の表出が活動資源となるため、メンバーには自己実現と成長、自分が本当にやりたいことの模索、自己の体験や内的資源の頻繁な見つめ直しと言語化、主体的活動、さらには活動の積み重ねを通じて徐々に発表には周囲からの承認が得られるという安心感などが派生した。そうしたOYOYOゼミにおける活動デザイン全般において特に特徴的だったのが、リレーレクチャーである。このプログラムにおいては、発表希望者は望む内容について

望む時期に自己申告し、自分自身の言葉で好きなように語ることが出来た。毎週の活動を通じて、発表内容やジャンルを問わず、発表すること自体が活動資源として歓迎されていった。ここでのナラティブを通じて、発表者本人にも社会の中での自己イメージを修正し強度を増すエンパワメントの発生もアンケート調査等から確認されている（加藤,2015）。

また、遊びの時空間限定ではあるが、社会や日常生活では発揮する場がない自らの全人性を復元し保障する場でもあり、一種のハーフシフトも行われていた。敷田（2010）が提唱するハーフシフトは、本来は個人が生業としている専門性をボランティア的に任意の場面で提供し、社会貢献や自己実現を拡張していくスタイルである。しかし、OYOYOの場合、この敷田の提唱するハーフシフト以外に、現在は生業としていない各自の専門性や経験などの内的資源からのハーフシフトが多数見られた。筆者はこれを敷田版ハーフシフトと区別して、第2のハーフシフトと呼んでいる（加藤,2016）。

つまりOYOYOゼミは、坂倉（2010,2013,2015a,2015b,2016）や田所（2014,2017）、田中（2007,2010,2011,2016,2018）ほかの「地域の居場所」「地域の活動拠点」等の先行研究と比較しても、起業や生業を意識せず、遊びに特化することで、実業（仕事や生活）の領域では得られない自己実現と成長が模索されていたと言える。「居場所」についての建築やコミュニティ・カフェ、環境デザインの論者たちの先行研究の検証と、そこに見られるつながりとしての「中間的な関係」（田中,2018）の論考から、親密でも疎遠でもない「顔見知り」という関係に、実は積極的な意味があることが見えてきた。これは言葉を替えると、家族や職場関係などと違って、責任も利害関係も伴わない中でこそ可能になる語りやつながりがある、ということである。OYOYOでは、部活時代からOYOYOゼミの時代までを通し、常連メンバーでも週1回2時間限定の関係であり、また初対面や単なる行きずりであっても趣味の表出によって同好者同士の対話が生まれやすく、この「中間的な関係」が豊富な場であったと見る事が出来る。

それは創立時のキャッチフレーズだった「大人の放課後」が具現化した姿であり、各自の趣味嗜好を集団で追求することによる楽しみの増幅であり、同時に、毎日が新たな外の世界との出会いの場であり、自己実現と成長の場でもあった。日頃自分の中に潜在させている趣味嗜好や経験を、活動コンテンツの提供という形で小集団の中で共有し、個人の中で不安定だったものを社会的な位置付けを確認することで安定させたり整理したりする場ともなった。活動と同時にOYOYOゼミという場自体も趣味縁のプラットフォームとして一緒に育っていった。

3.4. 第4章 対象事例：前橋〇〇部

第4章では、札幌の趣味縁事例OYOYOゼミの比較事例として、群馬県の県庁所在地である前橋市の中央商店街を中心に展開された前橋〇〇部の活動概要を記述し、分析を行った。

前橋〇〇部は〇〇の中に、自分の好きなモノ、趣味、行為、食べ物などを入れて部活を立ち上げるためのプラットフォームである（例：前橋ワイン部、前橋ジオラマ部、前橋除雪部）。誰の許可もいらず、思い立った人が勝手にFacebookなどのSNSで「部活動」を立ち上げ、部長として実行する。内容は極めて日常的でそれ自体は特別なものではないが、そうした「特別ではない日常の出来事に名称を与え、洗練されたデザインとコピーでパッケージングすることにより、普段の日常を特別なこととして解釈していくのである」（友岡,2015,24ページ）。

つまり前橋〇〇部は、「組織」を作るのではなく、誰でも使える「システム」を作りあげていった。それは誰もが日常行為で主役になり、SNSに提案されたテーマを元に「街で集まって何か

をする」という曖昧な行動を「部活」という名称とデザインでパッケージ化し、意義のあることに参加しているような特別感を醸成している。2015年12月末当時では約130の部活が発足し、街全体が部活動を受け入れる雰囲気が出来上がっていた。その自由さに魅力を感じ、現在は全国37箇所の市町村に「ご当地〇〇部」が発足し、前橋発の文化として全国に認知されている。³

前橋〇〇部は、OYOYOゼミと違って固定メンバーではない。活動内容も参加者も極めて流動的であり、一時のつながりに終わることも多い。これは、従来は選択縁のマイナス要素とされてきた組織の脆弱性や拘束力のなさなどを逆にとり、持続にかける運営の負荷の軽さに変えて、軽いつながり、その場限りかもしれないつながりとして商店街全域に解き放った活動デザインである。あくまでも趣味で遊びの領域の活動ではあるが、シャッターを下ろしたままの店舗も数多い前橋市中心部の商店街に、新たなコンテンツや空き店舗の用途転換、さらには本来であれば出会わなかったであろう人々に対話の機会をもたらしてきた(加藤,2017)。前橋〇〇部の活動はエリアへの来場動機を日々創出し、これまで商店街に来なかった人々を商店街に呼び込むことに成功した。

以上のようにOYOYOゼミも前橋〇〇部も、ともに趣味縁を契機としながら、趣味内容そのものへの傾注や深化を目指していない。むしろ多彩な趣味のバラエティ活動を小集団で実現させるプラットフォームとなることで、参加者たちの誰もが主役になる機会を提供し、同時に集団の中での共同行為の実体験を通して、様々な形での自己実現や成長、社会参加、尊厳の回復などの場を担ったと言える。

3.5. 第5章 暫定利用コンテンツとしての趣味縁

第5章は、こうした趣味縁拠点を集団の内部や参加者の変化からではなく、立地するエリア(外)との関係から見た場合の分析である。検証の結果、趣味縁拠点は産業エリアに遊びで間借りするだけの厄介者ではなかった。札幌市大通地区、前橋市中央商店街、ともに参入の背景にあるのは、エリアの深刻な衰退と空洞化という都市事情である。これはオフィス街、商店街といった従来の産業構造の内部での自律的なテナント更新が機能しなくなっている事態が背景にある。しかしながら次の有効な利用法がみつからないままであり、これまで否定的なニュアンスで語られることが多かった「暫定利用」についても都市計画の専門誌が特集を組むなど暫定的な手法にも目を向けざるを得なくなっていることが背景にある。

本研究では、第5章の分析の補助線に都市計画の「暫定利用」の概念を用いた。横張(2016)、明石(2016)らの先行研究を踏まえ、かつ筆者が参与観察で観測した実態をよく説明するものとして、暫定利用を、①時限的利用もしくは②目的外利用、③最長で10年、この3点をもって定義した。

衰退が進行する地区の老朽ビルでは空洞化が急激に進行したため、長期の空室を何としても避けたかった大家は、従来のオフィスや店舗に替わる新種のテナント候補を探さねばならなかった。結果的に、「暫定利用」で誘致されたのが趣味縁拠点であった、というのが本研究の仮説である。実際に、そうした大家たちは趣味縁拠点の参入によって、ビルが満室になった、

³ 2015年度グッドデザイン賞受賞概要「前橋〇〇部」紹介欄
<http://www.g-mark.org/award/describe/43151> (2018年11月2日最終確認)。

ビルのブランディング効果が起きたなどと高く評価している。趣味縁の拠点が暫定利用の最適解となった事例である。

また、趣味縁の拠点の参入は、都心の余剰空間を産業用途から非産業用途へと質的に転換させた。産業化の枠を外す趣味縁拠点の参入によって都心の空間は、零細な市民レベルの多彩なコンテンツで使われることが可能になる。市民個々の潜在的な資源を、商品化ではなく「遊び」の領域で活動コンテンツとして、小規模集団内で社会化し共有する手法である。ここでは趣味縁による参加者相互のコミュニケーションを、誰でも手軽に楽しめるような活動デザインが敷かれており、参加することで各自の潜在的な能力や技術、経験などを社会的価値化して楽しむことが出来る。まちにとっての最高のコンテンツは人（清水,2014,65 ページ）であり、面白い人々が集まる場所に人は集まってくる。つまり、趣味縁の拠点は、産業の枠内ではエリアに表層化（商品化）されることのなかった領域、レベル、規模の潜在資源の社会化と共有の場をもたらす。

このように、暫定利用は単なるつなぎのみならず、今日の都心エリアにとって積極的な意味がある。特に趣味縁の拠点による暫定利用は、長期的な展望を描きにくい時代の都市計画における「留保」という選択肢の提供、まちの市民個々に潜在する資源の健在化、新たなコンテンツをもたらすプラットフォーム形成、賑わいの創出、入居するビルや周辺エリアのブランディングなど、様々な波及効果をもたらしているのである。現代社会においては「暫定利用」には積極的な意味が見出されている、と筆者は考えている。

趣味縁の拠点は、都心エリアのスポンジ化対策を考えると、暫定利用の候補として適合性が高いというのが筆者の結論である。

以上が、第1章から第5章を通じての本研究の論旨である。

3.6. 第6章 結論と今後の課題

最後の第6章では、全体とまとめと研究を通じて得られた新たな知見、今後の課題を記述した。

本研究で得られた新たな知見は、主に以下の3点である。

第1に、第2章のつながりの先行研究の再整理により、現代日本社会における趣味縁の存在意義を各種統計やアンケート結果などの数値データを元に再検証した。すなわち、地縁血縁社縁などの従来の縁の衰退、選択縁の領域で新たな都市的なつながりが期待されるにも関わらず、日本では国際的に見ても、知らない人に対する「一般的信頼」（山岸,1999）が極めて低い。そうした中、生きがいやライフスタイルその他で国民全般の志向性の数値が高いのが趣味縁の活動であり、この傾向の中にこそ今後のつながりの拡充が期待されることを、本研究では指摘している。

第2に、従来の先行研究で扱ってきた趣味縁の対象事例は、将棋やガーデニング、鉄道、サブカルチャーなど、何らかの単一で特定テーマを契機にした集団であった。しかし本研究では、複数の趣味内容を契機として活動している集団に初めて着目し、その分析を行っている。結果的に、こうした集団では趣味内容についての深化や研鑽は目的とされておらず、折々に持ち込まれる趣味を契機にした集団活動の楽しみ、つながりの方に活動の比重が置かれていた。いわば趣味のプラットフォーム的な趣味縁集団であり、都市的な新たなつながりの形態と言える。

第3に、趣味縁の拠点が都心に参入する事例には共通して、都心部の衰退もしくはスポンジ

化の進行が背景にあった。さらに厳密に言えば、趣味縁の拠点、大家が「売りにくい」物件が参入の受け皿となっていることを本研究で指摘している。札幌の事例においては、不動産の権利所有者（大家）が実際の誘致に動いており、大家こそが趣味縁参入の隠れたキープレイヤーであった。市民有志による趣味縁利用は、オフィス街や商店街の物件を持つ大家側から見れば「目的以外での利用」、または当初は「一時的」であることが想定された「暫定利用」である。スポンジ化が進行する都心部において、不規則に発生するヴォイド（隙間）を埋め、しかも周囲にも市民個々の趣味による人間的な嗜好が自然と表出していく趣味縁拠点は、暫定利用のマッチングにおいて、筆者の観察事例から見ても適合性が高い。現場に空間用途の「留保」という選択肢をもたらすという意味においても、産業転換を媒介するという意味においても、市民に潜在する零細なコンテンツの社会的表出という場をつくることにおいても、今日の都心部において暫定利用は積極的な意味を持つ。また、スポンジ化に伴い空間用途の零細化、細分化が進む（饗庭,2015,125-126 ページ）と指摘されてきた。本研究の事例では、市民有志の本来であれば商業化されないような潜在資源が趣味縁活動のコンテンツとして社会に表出し、共有され、結果的に空間用途の細分化のバラエティをもたらしていた。趣味縁による活動拠点は、エリアにコンテンツの多様化と、市民が主役として活躍する場の提供、そして誰もが何らかの形で参加できるセミ・パブリックな居方（鈴木,1993）を提供している。

趣味縁が参加者本人のみならず参入したエリアにもたらしている社会的効果、そして特に暫定利用の積極的な意義の指摘、これが本研究の3点目の新たな知見である。

参考文献

- ・饗庭伸『都市をたたむ——人口縮小時代をデザインする都市計画』共栄書房, 2015 年.
- ・明石達生「都市における暫定利用——公共空間を中心に」『都市計画』第 65 巻 3 号, 2016 年, 12-15 ページ.
- ・浅野智彦『趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店, 2011 年.
- ・藤井知昭「クラブ型社会の可能性」栗田靖之編『現代日本文化における伝統と変容 3 日本人の人間関係』ドメス出版, 1987 年, 184-194 ページ.
- ・藤田英典「学校化・情報化と人間形成空間の変容——分節型社縁社会からクロスオーバー型趣味縁社会へ」『現代社会学研究』第 4 巻, 1991 年, 1-33 ページ.
- ・広井良典『コミュニティを問いなおす——つながり・都市・日本社会の未来』筑摩書房, 2009 年.
- ・池上英子『美と礼節の絆』NTT 出版, 2005 年.
- ・井上忠司「社縁の変容」栗田靖之編『現代日本文化における伝統と変容 3 日本人の人間関係』ドメス出版, 1987 年, 244-259 ページ.
- ・加藤康子「アートを核としたコミュニティに見られる『生きづらさ』を乗り越える契機とエンパワメントについて——札幌の OYOYO ゼミの事例から」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』第 20 号, 2015 年, 35-54 ページ.
- ・加藤康子「アートと趣味縁の拠点における『非クリエイティブクラス』のハーフシフトについて——札幌市の OYOYO ゼミの事例から」『文化経済学』第 13 巻 1 号, 2016 年, 36-44 ページ.

ジ.

- ・加藤康子「趣味縁研究の系譜と現代社会におけるその現れの一例——群馬県前橋市『前橋〇〇部』の事例から」『文化経済学』第14巻2号, 2017年, 46-54 ページ.
- ・栗田靖之編『現代日本文化における伝統と変容3 日本人の人間関係』ドメス出版, 1987年.
- ・NHK 放送文化研究所 第9回「現代日本人の意識」調査(2013) 結果の概要
<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/social/pdf/140520.pdf>
(2018年10月26日最終確認).
- ・OECD 編著『図表でみる世界の社会問題 OECD 社会政策指標——貧困・不平等・社会的排除の国際比較』明石書店, 2006年.
- ・坂倉杏介「地域の居場所からのコミュニティづくり——芝の家の『中間的』で『小さい』グループ生成を事例に」『慶応義塾大学日吉紀要 社会科学』第21号, 2010年, 63-78 ページ.
- ・坂倉杏介「『共同行為における自己実現の段階モデル』による『地域の居場所』の来場者の行動分析——東京都港区『芝の家』を事例に」『地域活性研究』第4号, 2013年, 23-30 ページ.
- ・坂倉杏介ほか「『共同行為における自己実現の段階モデル』を用いた協創型地域づくり拠点の参加者の意識と行動変化の分析」『地域活性研究』第6号, 2015年a, 96-105 ページ.
- ・坂倉杏介ほか「NPO 法人『ミラツク』の超域型場づくりフレームワークによる地域活性化の特徴分析——場づくりの比較分析や共同行為における自己実現の段階モデル分析を通じて」『地域活性研究』第6号, 2015年b, 155-164 ページ.
- ・坂倉杏介「前橋市の中心市街地活性化におけるコミュニティ形成のプロセスの研究」(発表要旨), 地域活性学会第8回研究大会(2016年9月3日開催).
https://www.hosei-web.jp/chiiki/taikai/160322/f_03.pdf (2018年10月29日最終確認).
- ・敷田麻実「専門家の創造的な働き方としてのハーフシフトの提案——科学技術コミュニケーターとしての隣接領域での無償労働」『科学技術コミュニケーション』第8号, 2010年, 27-38 ページ.
- ・清水義次『リノベーションまちづくり——不動産事業でまちを再生する方法』学芸出版社, 2014年.
- ・鈴木毅「都市のオープンスペースの居方」『建築技術』517号(1993年7月号),
シリーズ「『居方』からのデザイン」連載第1回, 1993年, 204-207 ページ.
- ・鈴木毅「オープンな居方」『建築技術』534号(1994年10月号),
シリーズ「『居方』からのデザイン」連載第7回, 1994年, 150-153 ページ.
- ・田所承己「〈つながる/つながらない〉に対する基礎的視点」長田攻一・田所承己編『〈つながる/つながらない〉の社会学 個人化する時代のコミュニティのかたち』弘文堂, 2014年, 2-17ページ.
- ・田所承己『場所ではつながる/場所とつながる——移動する時代のクリエイティブなまちづくり』弘文堂, 2017年.
- ・田中治彦「関わりの中としての『居場所』の構想」田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房, 2001年a, 3-12ページ.
- ・田中治彦「子ども・若者の変容と社会教育の課題」田中治彦編『子ども・若者の居場所の

構想』学陽書房, 2001年b, 15-35ページ.

- ・田中康裕 公開スライド「子どもと大人との中間的な関係が生まれる地域の場所」

2010年05月29日.

<https://www.slideshare.net/t-yasuhiro/100529-35799818> (2019年2月15日最終確認).

- ・田中康裕 公開スライド「まちの居場所における主(あるじ)」2011年01月29日.

<https://www.slideshare.net/t-yasuhiro/110126> (2019年2月16日最終確認).

- ・田中康裕 公開スライド「『まち』と『居場所』」2013年02月21日.

<https://www.slideshare.net/t-yasuhiro/130216-16579530> (2019年2月16日最終確認).

- ・田中康裕「中間的な関係(親密ではないが全くの他人でもない関係)についてのメモ」, ニュータウン・スケッチ, 2016年9月1日投稿, 2017年11月18日加筆修正.

<https://newtown-sketch.com/blog/20180412/220023> (2019年2月15日最終確認).

- ・田中康裕「まちの居場所の可能性を考える」, ニュータウン・スケッチ, 2018年4月12日投稿, 2018年5月5日加筆修正.

<https://newtown-sketch.com/blog/20160901/220035> (2019年2月15日最終確認).

- ・友岡邦之「地域振興団体における領域横断性と『中庸のネットワーク』——群馬県の事例にみる新しい組織論的特性の分析」『地域政策研究』第17巻第4号, 2015年, 19-31ページ.

- ・上野千鶴子「選べる縁・選べない縁」栗田靖之編『現代日本文化における伝統と変容3 日本人の人間関係』ドメス出版, 1987年, 227-243ページ.

- ・山岸俊男『安心社会から信頼社会へ』中央公論新社, 1999年.

- ・横張真「都市の縮退と土地の暫定利用」『都市計画』第65巻3号, 2016年, 16-19ページ.